

古里の学びや

小国編⑬

続・地元の高校



小国支援学校でフロアホッケーを体験する
小国高の生徒(右) 8日、小国町

小国町は「ホッケーの町」だ。全国大会で活躍する小国高がその象徴だが、近くの小国支援学校も室内で楽しむフロアホッケーに取り組んでいる。硬質のボールを使うホッケーに対し、フロアホッケーはフェルト製バックでゴールを狙う。知的障害者のスポーツ大会スペシャルオリンピックスの正式競技にも採用されている。

8日、小国高の男子生徒5人が支援学校を訪れ、支援学校生や福

祉施設利用者ら約20人が集う月1回の練習会に加わった。小国高ホッケー部3年の椋野穂君は早速、フロアホッケーのこつをつか

んだようだ。「思っていたよりもドリブルしやすい」。汗を拭った。

小国町と南小国町の社会福祉協議会は2005年度から、小国高生が福祉ボランティアを体験する「チャレンジ小国GO!」事業を続けている。ほぼ全ての生徒が最低1回は自主参加しており、1人

暮らしの高齢者宅へ食事を届けた。スタッフとして福祉施設で開かれる祭りを手伝ったりと豊富な企画は年間15回程度。フロアホッケー練習会への参加も、その一つだった。

試合形式の練習が始まった。パスやドリブルをしながらゴールを目指す。練習をサポートしている福祉施設職員、時松寿幸さん(33)は「障害者も健常者も一緒に楽しめるフロアホッケーの存在を、小国高の生徒にも実感してほしい」と願い、体育館を走り回る生徒らを見つめた。

彼らを引率した小国町社協の村上伸也さん(27)は小国高OBでもある。「自分が高校生のころより、生徒のボランティアに対する意識は高い。高校として力を入れているのが伝わってくる」。ボランティア活動を通じて生徒と住民が密接につながり合う。その奮闘ぶりが、高校の存在感を高めているというわけだ。

椋野君がシュートを決めた。地域の方と交流を深めたくて参加した。楽しめてよかった。3年の穴見洗智君も「初めて会う人が多かったけれど、障害者の方ともスポーツを通じて、お互いを分かり合えたような気がした」と充実感を漂わせた。

(宮崎達也)

ボランティアで住民とつながる